第4章　送られてきた手紙

けっきょく椅子の修理が完了したのは、それから四日後だった。

持ち主の大きな身体を支えるには、そうとう頑丈な脚にしなければもたないだろうと、いろいろな工夫を加えたためだ。二枚の板材を接ぎ合わせるにも接着剤だけでなく、三角形のクサビを組み込んだり、椅子の回転軸との接合部分を入れ子にして強化したりと、むかしから伝えられてきた木工芸の技術を念入りにほどこした。

しかし、そのあいだじゅう、井上さんは自分の腕が鈍ったことを痛感させられた。現役の職人だったころには苦もなくやっていたことができない。こうすればいいのだとわかっていても、道具を持つ手が言うことをきいてくれないのだ。思いがけないほど力量が落ちていることに気づかされて、がくぜんとするばかりだった。

ときどき真也がやってきて、ベランダの外から熱心に覗き込んでいった。

「ねえ、リーリ、椅子を直すのって楽しい？」

「そりゃそうさ。楽しくってしようがないね」

「新しい椅子をつくるのと、どっちが楽しい？」
「そうだな、やっぱり新しい椅子をつくるほうがいいな」
「じゃあ、つくれば？」
「ううん、痛いところを突いてくるな。……ほら、またチビが妙な咳をしてるぞ」
返答に困って、なんとか話題をそらすこともあったが、井上さんは孫の質問にはできるだけきちんと答えるつもりだった。いまの祖父母の状況に、真也が不審を抱いているのは確かである。いいかげんな答え方をすれば、ますます疑いを深めるにちがいない。
このごろ、チビが苦しそうな咳をするようになった。真也も気づいているはずだが、これは明らかによくない病気だ。おそらくフィラリア症にちがいない。
フィラリア症は、恐ろしい犬の心臓病だ。蚊によって媒介されたフィラリアの卵が、約二十センチの細い線虫となって心臓や心臓の近くの大静脈のなかにたくさん寄生し、血液の流れをわるくしたり、心臓の働きを弱めたりする。そのため犬は、肺や気管が詰まったように咳をしたり、呼吸が荒くなったりする。
犬が若くて健康なあいだは抵抗力もあるが、チビのように高齢になると感染しやすく、きびしい症状があらわれるようになる。予防薬は飲ませていたのだが、寄生をまぬがれなかったようだ。
「やっぱり病院に連れてったほうがいいよね？」
と、真也は心配そうに言う。

しかし、もう手遅れだ、と井上さんは思っている。
「どうかな。チビは年をとってるから、病院に連れてっても治らないかもしれない」
そう井上さんは説明した。
「このままにしておいてやったほうがいいんじゃないかな。真也くんに散歩に連れてきてもらったり、そばで眠ったりしているのが、チビにとってはいちばん幸せなんだから」
「……そうかなあ」
と、真也は不満そうにつぶやいた。
「ママも同じこと言ってたけど」
ここへ引っ越してくる少し前に、井上さんはチビの咳に気づいていた。それで、真也にチビを預けることになったとき、そのことを洋子に話しておいたのだった。
真也はベランダの手すりに顔を押しつけて、そうかなあ、とまたつぶやいた。
「そうなんだよ、真也くん」
と、井上さんは感情をおさえて答えた。
椅子の修理が終わる日の朝早く、井上さんは激しい雨の音で目をさました。
せっかく完成を間近にした、だいじな椅子がベランダで濡れている。井上さんは飛び起きて、身ごしらえもそこそこに雨戸を開けた。だが、雨は降っていないどころか、相変わらずの好天気で、雑木林の向こうで朝日が昇りはじめていた。
冷たい空気にさらされながら、ようやく気づいた。林の木々の葉が、いつのまにかすべ

て枯れ色になっていた。ついこの前まで、まだ緑が残っていたのに、一晩のうちに、すっかり枯れ葉になってしまったようだ。

激しい雨音のように聞こえたのは、風に揺れる枯れ葉がたがいに擦れ合う音だった。

「なんということだ。……椅子を修理してるあいだに、みんな枯れてしまった」

そう溜め息まじりにつぶやくと、布団のなかから奥さんが言った。

「あなたが気づかなかっただけですよ。……とっくに枯れ葉になってました」

奥さんのしっかりした言い方には返す言葉もなくて、井上さんは憮然とした。

「そうか、気がつかなかっただけか」

ふたたび林を見返ると、あの柿の木も、あれほどたくさんつけていた実をほとんど失っている。裸同然になった柿の木の、梢の先に二個だけ残った実が、朝日を浴びて赤い灯火のようにかがやいていた。

――まあ、それほど修理に集中してたということだな。

負け惜しみのように、そう自分に言いきかせるほかなかった。

木工の技量が落ちたと自覚するだけでも充分がっかりしているのに、木の葉が枯れたことにも気づかないほど目や耳が利かなくなってしまったとは。

――これじゃチビのやつと、そんなに違いがないみたいだぞ。

井上さんは肩をすくめながらヒーターに点火し、そのままベランダに出て椅子の修理に取りかかった。すでに脚は完成しているのだが、ついでに少しぐらつきかけている肘掛け

の部分も補強しておくつもりだった。

奥さんが朝食の準備をはじめたときは、最後の点検に入っていた。

脚の付け根を丹念に調べたり、肘掛けに体重をかけてみたり、椅子の全体を揺らしたりしているうちに、ふと修業時代を思いだした。あのころ、こうした製品を完成させるたびに、きまって同じようなことをしたものだった。まるで儀式のように。

部屋のなかから叫び声が聞こえたのは、ちょうど点検を終えたときだった。

ガラスの向こうで、大きな火が燃え上がっていた。

あわてて戸を開けると、いきなり炎が顔面へ迫ってきた。大急ぎで着ていたジャンパーを脱ぐと、それを楯にして炎へ立ち向かっていった。

ほんの数秒のことだったはずだが、井上さんにはたいへん長く感じられた。ジャンパーの端から覗いてみると、炎のもとになっているのがフライパンだとわかった。

井上さんはジャンパーでフライパンをおおった。勢いよく燃えていた炎が、あっけないほど簡単に見えなくなった。しかし、ジャンパーがくすぶっていた。

手前に突き出ているフライパンの把手をつかんでシンクへ運んだ。つかんだ右手に鋭い痛みが走った。把手が焼けていた。しかし、放すわけにはいかない。左手で水道の栓をひねった。ほとばしりでた水が、ジャンパーの上に降り注いだ。

ガス台の周辺を見まわしたが、どこも燃えていなかった。さいわい炎はフライパンのなかでとどまったようだ。ほっとして振り返ると、テーブルの向こうで奥さんが立ちすくん

でいた。恐怖にみちた顔が血の気を失っていた。目もうつろだった。
「おい、だいじょうぶか？」
と、井上さんが声をかけても、奥さんの表情は変わらなかった。
近づいてみたが、どこにも火傷らしいものはなかった。胸の前で握り合わされた両手がこわばっていた。その手に井上さんが触れたとたん、とつぜん激しく震えだし、
「ああ、ああ」
と、言葉にならない声を発した。ショックが大きかったようだ。両膝から力が抜けたらしく、くたくたとしゃがみ込んでしまった。
「もう、だいじょうぶだよ。さあ、こっちに座って」
井上さんが肩を抱いてやると、ようやく正気に戻ったようだ。のろのろと椅子に腰かけて、ぼうけたように見上げてきた。
「……フライパンに……油を入れたら……急に……燃え上がって」
幼い子どもがなにかを言い訳するように、たどたどしい口調で言った。
焦点の定まらない瞳が、奇妙なほど小刻みに揺れていた。
「いいんだよ、もう。心配するな」
そう答えながら、どうしてだろう、と井上さんはくびをかしげていた。
いつもどおりの朝食を準備していたのなら、フライパンなど必要はないはずだ。
——いったい、なにをつくろうとしたんだろう。

不審に思いはしたが、それを聞きただしてみても、どうしようもあるまい。これほど怯えきっている奥さんを、さらに混乱させてしまうだけのことだ。

ようやく人心地がつくと、きなくさい臭いが充満していた。換気扇はまわっているが、まだ空気に油煙がまじっているようだ。すべてのガラス戸を開け、玄関のドアも開けた。そのとき初めて、右手に火傷を負っていることに気づいた。

てのひらと五本の指が真っ赤だった。よく見ると表皮がむけて縮緬のようになっていた。見ている間に鋭い痛みが襲ってきた。右手の全体が、胸の動悸と合わせてズキンズキンと脈打っていた。てのひらを握ろうとすれば痛いし、開いているのも苦痛だった。

奥さんは、ぼうっとして椅子に腰かけている。とても頼りにはならない、と井上さんは自分で手当てをはじめた。いまだにジャンパーの上に注いでいる水道の水へ右手を差しだした。激しい痛みが手から肩へと貫いた。歯を食いしばって耐えた。火傷は冷やすのがいちばんだと聞いている。あまりの冷たさに、さっきまでの痛みとはべつに、しびれそうな鈍痛が加わった。五分ほど耐えたあと、てのひらを乾いたタオルに押し当てた。

救急箱がどこにあるかわからない。調理台の上に出ていた食用油を、てのひらに塗りたくると、まもなく痛みが遠ざかった。あとは空気に触れないようにと、右手をタオルでぐるぐる巻きにして、とりあえずの応急処置を済ませた。

井上さんは隣室のソファに腰を落とし、大きく肩を上下させて、深い吐息をついた。

「なんてこった、ひどい目に遭ったもんだ」

だれに言うともなく、そんな言葉が口をついて出た。
それから気持ちを整えようと、しばらくのあいだ目をつむった。さっきの炎が目の奥に焼きついていた。とっさに脱いだジャンパーのことを思いだした。
——あれは特別に気に入ってたんだがな。
だいぶ前に、アメリカで開催された世界家具フェスティバルへ出かけたとき、自分で見立てて買ってきたバックスキンのジャンパーだった。
——あのフェスティバルには、なにを出品したんだっけ。
いつしか炎も火傷も忘れて十年も前の記憶を呼び戻そうとしている。それきり目を閉じたまま、井上さんは家具フェスティバルの光景を思い浮かべていた。

その日、井上さん夫妻は一日じゅうなにもしないで過ごした。
井上さんは右手をかばって暮らし、奥さんはしばらくテレビを眺めるばかりだった。二人とも、あれきり朝食をとらないままだが、まったく食欲が湧いてこなかった。全身から力が抜けてしまって、なにをするのも億劫だった。
しかし、ぼんやりしているあいだにも、ちゃんともうし合わせを済ませておいた。
「なあ。今朝のこと、洋子には内緒にしとこうな」
「……そうね」
「くれぐれも火には気をつけるように言われてたしな」

「ええ。……引っ越し前に不動産屋さんからも念を押されましたからね」

このアパートを借りることが決まったとき、紹介してくれた地元の不動産業者がくどいぐらいに重ねて言ったそうだ。

「オーナーは、できるだけお年寄りにお貸ししないように、と言うんですよ。みなさん、火のことが心配なんです。うっかり火の用心を忘れられると、たいへんですからね」

それを洋子から聞いたときは、ばかにするな、と腹立たしく思った。それが現実のことになるとは、まったく思いもかけなかった。

井上さんはソファに腰かけ、奥さんはそばの畳に座って、日がな一日ぼんやりしたり、うつらうつらしたりして暮らした。雑木林を越えてくる陽光が、ガラス戸を通して室内へまぶしいきらめきと風に踊る枝の影を送ってきた。それらは畳の上や白い壁面を舞台に、さまざまな動きかたをしては、二人のうつろな目に安らぎを与えた。

ことに壁面に映る光は変幻自在で、大きくなったり小さくなったり、円形や楕円形や細かい粒やおぼろ模様となって、ゆらゆらと揺れつづけた。だれかがガラス戸の向こうから鏡でも使って、いたずらでもしているかのようだった。

二人はテレビを消して、そのようすを眺めつづけた。

やがて夕暮れになると、木々をかすめてくる光が徐々に赤みをおび、やがて、ふっつりと消えてしまった。井上夫妻は身じろぎもしないで終幕の場面まで目を奪われていた。

ベランダのあたりから、ガフガフというチビの咳き込みが聞こえてきた。

井上さんは立ち上がって電灯をつけた。すると、リーリ、エーバと呼ぶ声がした。ベランダのガラス戸を開けると、真也とチビが見上げていた。
「なあんだ、いたんだね」
と、真也が安心したように言った。
「部屋のなかが真っ暗なんで、いないのかって思っちゃった」
「ああ、ちょっと、うたた寝をしてたんでね」
井上さんは右手を腰の後ろに隠して、さりげなく笑ってみせた。
足もとに回転椅子がある。修理が終わって点検を済ませたのを思いだした。
「真也くん、ちょっと二階の近藤さんへ知らせてきてくれんか。……椅子が直ったから、いつでも受け取りにきてくださいってな」
「うん、いいよ」
真也は、すぐに駆けだしていった。
手すりにつながれたチビが取り残されて、またガフガフと咳き込んだ。
「おい、チビ、苦しいんだろうな。……おたがい年をとると楽じゃないよな」
そう話しかけていると、奥さんが井上さんの後ろにきて、チビを呼んだ。
チビは咳をしながら尻尾を振ったが、ベランダへ伸び上がる元気はなさそうだった。
「可哀そうね。……待ってて、いま抱っこしてあげるから」
奥さんは玄関を出て、外をまわってベランダの下へきた。チビが嬉しそうに大きな身体

をすり寄せていった。奥さんはしゃがんで、チビのくびすじを抱きしめた。
「こんばんは、近藤です」
入れ違いに、玄関で声がした。
「お世話になってます。……椅子を直してくださったそうで」
「どうぞ。……こっちへ入って運んでってくださいな」
井上さんは玄関のドアを開けて、二階の巨漢を出迎えた。
近藤さんは恐縮しながら上がってきて、ベランダの椅子を持ち上げた。
「いやあ、立派になりましたね。ほんとに、ありがとうございます。……また、この椅子に座れるなんて、ラッキーです」
「だいぶ時間がかかっちまって、ご不自由だったでしょう」
「いやいや、とんでもない。……で、修理代はおいくらでしょうか?」
「いいんですよ、こちらも楽しませてもらいましたからね」
「それじゃあ困ります。せめて材料費だけでも」
「ほんとにいいんですよ。どうぞ、お気になさらないでください」
井上さんは近藤さんの背中を押すようにして玄関へ送りだした。そのあいだも右手は腰の後ろへ隠していた。火傷の原因を尋ねられたりしては面倒だ。
近藤さんは嬉しそうに椅子をかついで階段を昇っていった。それを見送ってから、ベランダへ戻ると、横たわって甘えるチビを奥さんと真也が撫でてやっていた。チビは気持ち

よさそうにうつぶして、あの苦しげな咳もしていなかった。
外はだいぶ暗くなって、雑木林から冷たい風が吹きわたってきた。
「さあ、真也くん、そろそろ帰らなきゃな。……エーバも風邪を引くぞ」
「うん。じゃあ、エーバ、またね」
真也が引き綱をたぐると、チビがなごりおしそうに奥さんの手をなめた。
玄関から入ってきた奥さんがドアを閉めながら、あら、と言った。
「お手紙がきてるわ。……だれからでしょう?」
郵便受けから茶色い大型封筒を取りだして、差出人をたしかめた。
「あなた、弁護士さんからですよ」
「そうか、債務整理についての報告かな?」
と、井上さんは受け取りながらつぶやいた。
左手で苦心して開封すると、案の定、中身は債務整理の進み具合についての報告で、すべては順調に行なわれているといった書面だった。いっさいを弁護士にまかせてあるので、とりたてて検討すべきことも見あたらなかった。
書類を戻そうとして、封筒の底になにか入っているのに気づいた。取りだしてみると、クリップでとめられた二通のハガキだった。
「なんだろう、債権者からの手紙かな?」
クリップをはずしてたしかめた。二通とも井上木工所あてになっていた。

「おや、これは家具を買ってくれたお客さんからだよ」

つぶやきながら、井上さんは微笑んでいた。懐かしかったのだ。

井上木工所には、家具を購入したお客からの手紙がときどき配達された。使い勝手がよくて気に入っているというお褒めの言葉だったり、テーブルの表面につけてしまった傷跡を消す方法はないだろうかという相談だったり、引き出しの具合がよくないので修理してもらいたいという要望だったり、さまざまな文面が記されていた。

それらの手紙はすべて井上さんのもとへ届けられることになっていた。みずから丹念に読んだあと、かならず納得のいくような返事を出した。

ほとんどの家具が百貨店や家具店で売られたが、こうした手紙は井上木工所へ直接に送られるようにしてあった。どの家具にも小さなプレートが貼りつけてある。直径三センチの丸いステンレス板に、社名と所在地と電話番号が打刻されているだけのものだが、それは井上木工所が誇りとしている信用の印だった。

もちろん百貨店や家具店に問い合わせがあった場合は、お客の名前と住所と電話番号を伝えてもらうことになっていた。連絡があると、ただちに製造にたずさわった職人がお客のもとへ電話をかけた。

井上さんは二通のハガキを読んだ。

〔御社のカントリー・ファニチャーを長年愛用していた母が亡くなりまして、形見にライティングデスクをもらったのですが、そのふたが壊れておりました。せっかくの

形見なので修理をお願いしたいのですが、どうすればよろしいのでしょうか。〕
〔十五年前に購入した長椅子の背の部分が、かなりぐらついています。引っ越しのときに運搬の途中で階段から落としたのが原因です。気に入っているので、なんとか修理したいのですが、お願いできますか。〕
二通とも修理の問い合わせだった。
倒産してしまった会社あてに送られたハガキが、郵便局から返送されることなく、臨時の受取人となっている弁護士のもとへ転送されたらしい。もう修理も含めて、いっさいの業務が行なわれていないことを知らせる義務は、弁護士にはないのだろう。
――まいったな、お客にまで倒産の通知が行き渡るわけもないからなあ。
そう思って、井上さんは渋い顔になった。
内心のどこかで、以前どおりの誇りがうずいていた。自分たちのつくった家具を愛用してくれるお客からの問い合わせに、きちんと答えたいと思った。
――しかし、いまの自分になにができるというのだ。
井上さんは胸に痛みをおぼえながら、二枚のハガキを封筒のなかへ戻した。ダイニングキッチンを見まわし、封筒の置き場所をシンクの上にあるつくりつけの戸棚と決めた。
――あそこなら、めったに目に触れることもないだろう。
奥さんが、こちらへ背中を向けて夕食の準備をしている。ようやく食欲が出てきたらしい。今朝からなにも食べていないのだから、当然のことだ。井上さんも空腹だった。

右手に痛みはなくなっていた。巻き付けていたタオルをおそるおそるほどくと、油のついたてのひらがあらわれた。だいぶ赤みはとれている。縮緬のようだった表皮が、そのままの状態でくっついていた。ゆっくりと握ったり開いたりしてみたが、つっぱる感じはあっても痛くはなかった。やはり初めの処置がよかったのだろう。

――これなら病院へ行くこともないようだな。

井上さんは、ほっとした。

もしも火傷がひどい状態になっていたら、いやでも治療をしてもらわなければ、と覚悟していたのだった。井上さんの病院ぎらいは子どものころからだ。若いころ、ノミやキリダシの扱いを誤って何度か深い傷を負ったが、医師の手当てを受けたことはなかった。それでも体質のせいか、化膿することもなく、いつのまにか治っていた。

いまでも両手のあちこちに当時の傷跡が残っているが、刃物傷は木工職人の勲章だよ、などとうそぶいていたこともある。

夕食のおかずは、朝食べるはずだったアジの開きと漬け物に味噌汁だった。おまけに、みんな冷えたままだ。火がこわくて、と奥さんが小声で言った。

「ごめんなさい。……どうしてもガスに点火できないの」

ご飯だけは炊飯器で保温されていた。それが、せめてもの救いだった。

井上さんは苦笑しながら、固くなったアジの身を箸でほぐした。

「そういえば、今朝はどうしてフライパンを使おうとしたんだね？」

あのときから疑問だったことを、ようやく聞いてみた。
「いつもの朝ご飯なら、フライパンと油なんかいらないはずじゃないか」
「さあ、わたしも今日は一日じゅう考えてたんですけど」
奥さんはくびをかしげながら、頼りなげに答えた。
「昨夜の残りの鶏のから揚げを、どうも揚げ直そうとしたみたい」
「しかし昨夜は、肉じゃがだったじゃないか」
「あら、そうでした?」
「鶏のから揚げなんて、どこにも残っちゃいないだろ」
井上さんが言うと、奥さんは途方に暮れた面持ちで見返してきた。
——おかしいぞ。どうしたんだ。
井上さんはひそかに思った。鶏のから揚げなど、昨夜はおろか、ここ一年以上も前から食べた記憶がない。いったい奥さんはなにを勘ちがいしているのか。
しかし井上さんは、その不審な思いを、けっして口に出すまいと思っていた。

翌日も、井上さん夫妻はなにもしないで暮らすことにした。
例によって初冬の日ざしのなかで、ぼんやりしていると、こんな生活も捨てたもんじゃないな、と思えてきた。これが老後の余生というものなら、そこにどっぷり漬かって、日がな一日をのんびり過ごすのもいいではないか。

――いずれ、もう少し年をとって死ぬまでのあいだなのだもの。

井上さんには、そんな気がしてきた。

――さいわい細々ながらも生活していくだけの年金はもらえる。それに……。

奥さん名義の定期預金もあるはずだ。万一のときのためにと長年たくわえてきたらしいが、言ってみればヘソクリである。ちょっと前まで、これで近いうちに海外旅行でもしましょうよ、と奥さんが楽しみにしていたのだった。

倒産の直前まで、井上さんは金策にあえいでいた。だが、奥さんの定期預金にまでは手をつけることはできなかった。その気になったとしても、きっと奥さんの手厳しい抵抗にあっていたことだろう。それが、いまでは幸いだったと思っている。

お昼少し前に、ひさしぶりに洋子が訪ねてきた。

持参した手製のちらし寿司を、さっそく食べることになってテーブルをかこんだ。お茶をいれようと、洋子がポットで湯を沸かしはじめた。

コンロのそばから、なにげなさそうに室内のあちこちを見ていたが、

「なにかあったら、かならず話してちょうだいよ」

と、ふいに疑わしそうな口ぶりで言いだした。

「ねえ、お父さんの右手はどうしたの？」

「いや、べつに。……椅子を修理してるうちに、ちょっと怪我をしただけだ」

「ほんと？　昨日は、暗くなっても明かりをつけてなかったそうじゃないの」

「ああ、真也くんに聞いたんだな。……お母さんと思い出話をしてるうちに、うたた寝しちまったのさ。ヒーターが、いいあんばいに温かくてね」
「お父さんにしちゃ珍しいわね、うたた寝なんて」
「ほら、あの壁を見てごらんよ。外からさし込んでくる光が壁面に映って、いろんなふうに動いてるだろ。あれが催眠効果になってるらしいんだ」
「二人とも休養は必要だけど、眠ってばかりいて、ボケないでちょうだいよ」
と、洋子は呆れたように言って、ようやく疑いの表情をほころばせた。
奥さんは、父娘のやりとりを知らん顔で聞いていた。しかし、ちらし寿司を食べる段になると、昨日の食欲不振を忘れたように、ひたすら箸を動かした。
「お母さん、ずいぶん食欲があるわねえ。それなら安心だけど」
「あなたの腕がいいからよ。こんなに美味しいちらし寿司は、ほんとにひさしぶり」
いつものように母と娘が話している。なんの変わりもないように見える。昨日の朝からのことが夢だったようにも思える。——井上さんは黙って二人を眺めるばかりだった。
午後三時ごろ、ふだんより早く真也がやってきた。
リーリと呼ぶ声がしたので、ガラス戸ごしに見ると、チビが盛んに尻尾を振っていた。なぜか真也の姿が見えない。かくれんぼかい、と言いながら井上さんは戸を開けてみた。すると、ベランダの陰から真也が飛びだした。サッカーのユニフォームを着ている。
「見て、見て。ぼく、今度の試合からレギュラーで出場するんだよ」

「ほう、すごいじゃないか」
「五年生でレギュラーになったのは、ぼくとあと二人だけなんだ」
と、真也は顔をかがやかせて、得意そうに言った。
「ねえ、試合、観にきてくれる？」
「よし、エーバと一緒に応援しに行くよ」
「やったあ」
「そうか。ママのちらし寿司は、レギュラーになったお祝いだったんだな」
井上さんは、ソファに腰かけている奥さんへ声をかけた。
「見てごらん、真也くんの晴れ姿だぞ。ユニフォームがよく似合ってる」
奥さんは、のろのろと立ち上がり、背伸びして外を見た。いままで、うたた寝をしていたせいか、歩いてくるのも億劫らしい。
「よかったね、真也くん」
と、いつになく気乗り薄な言葉をかけた。
真也が不審そうな目つきで井上さんを見上げた。
「なあ、真也くん、湧水公園へ行こうか。きみの走るところを見てみたいんだ」
「うん、行こう。早く出ておいでよ」
真也はチビを引きたてて玄関のほうへまわっていった。
井上さんは大急ぎでコートをまとい、じゃあ、行ってくるよ、と奥さんに言った。

奥さんはソファの背にもたれて見送りながら、黙ったままうなずいた。
戸外へ出ると、すぐに真也が聞いてきた。心配そうな声音だった。
「ねえ、リーリ。……エーバは具合がわるいの？」
「そうじゃないんだ。ただ、ちょっと疲れてるだけだよ」
「なら、いいけど。……なんとなく前のエーバと違うような気がする」
「引っ越しとか、いろいろあったからね。リーリの会社もなくなってしまったしさ」
「……倒産？」
「そうなんだ。……それは、とてもたいへんなことなんだよ」
「リーリはもう働かないの？」
「会社がなくなったから、働きたくても働けないのさ」
そうかあ、と真也はうつむいてつぶやいた。
「あの椅子を直してたときのリーリって、かっこよかったんだけどな。もっともっと、いろんな椅子やテーブルを、直したらいいんじゃない？」
と、真也が見上げてきた。
その真剣な顔を見返して、井上さんは歩みをとめた。

ひとりごと　約束したんだ

ならんで歩いてたリーリが、いきなり立ち止まって、ぼくの顔を見つめた。なんとなく、いつものリーリとちがっているように思えて、ちょっとこわくなってしまった。

「そうだな、真也くん。……そうだよなあ」

と、リーリは大きな声で言ったんだ。

「働きたかったら働けばいいんだよな。……もっといろんな家具を修理すればいいんだ。そうすりゃ、ぼんやりしてる暇はなくなって、かっこいいリーリになれるんだよな」

リーリは、ぼくの言ったことを繰り返してるんだ。孫のぼくが、なんの気もなしに思ったまんまを言ったのに、お祖父さんのリーリは真剣に聞いてたんだよ。

これにゃ、まいったね。ほんとに、びっくりだった。

チビまでびっくりして、いつものガフガフをはじめてしまった。

なんだか知らないけど、リーリはえらく張り切っちゃって、ぼくに言ったんだ。

「真也くん、リーリはやるぞ。井上木工所の家具を買ってくれた、だいじなお客さんの頼みを、なんとかして聞いてあげなきゃいかん。それこそ職人の誇りというもんだよな」

仕方ないから、ぼくはうなずいてた。するとリーリが、約束するよって言ったんだ。

「とりあえず、あのハガキをくれたお客さんに返事を書こう。……昨夜は、とてもできっこないと思ったんだが、危うく職人の誇りを捨ててしまうところだった」

なんのことを言ってんのか、ちっともわからなかったけど、リーリが自分で約束するって言ったんだから、きっとだいじなことなんだろう。ぼくは、その証人にされてしまったわけだ。いいよ、リーリ、きっと約束を守ってね。

ここんとこ、いろんなことが起きるもんだから、ぼくは忙しくてしょうがない。

リーリの会社が倒産しちゃっただろ。それで、リーリとエーバが近くに引っ越してきただろ。おかげでチビがぼくんちで暮らすことになっただろ。そのチビが変な咳をしはじめただろ。リーリが手を怪我して、そのうえエーバまでちがう人みたいになっちゃってるだろ。

まったく心配だらけで忙しくなっちゃって、どうしたらいいかわかんないよ。

でもさ、サッカーチームのレギュラーになれたんだから、まあいいか。

選ばれなかったやつらはくやしいだろうけど、練習量がちがうと思うよ。ぼくなんか一年生のときからコーチにしごかれて、泣きながら走らされてきたんだもの。やめ

ていくやつを横目に、とにかく一生懸命に練習したんだ。

せっかくレギュラーになったんだから、もっとがんばらなきゃ。ちょっとでもしくじったら、また補欠落ちだからな。ぼくらのコーチは、ほんとに厳しいんだ。

それにしても、今日のリーリにはびっくりさせられっ放しだった。だって湧水公園の広場で、ぼくと一緒に走りだすんだもの。リーリが走ったの、初めて見たよ。

あれなら、きっと約束を守れるさ。ぜったいだよ。